

第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会レポート

第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会に参加した広報委員の先生方に感想をうかがいましたので、ご紹介します（2024 年 7 月時点で広報委員の先生方にご協力いただきました）。

第 61 回日本リハビリテーション医学会学術集会は、2024 年 6 月 13 日（木）～16（日）に東京都渋谷区（セルリアンタワー東急ホテル・渋谷エクセルホテル東急・渋谷ヒカリエ・渋谷区文化総合センター大和田）で開催されました。天気にも恵まれ、5,000 人を上回る参加登録、4,000 人を上回る現地での参加者となりました。

【酒井朋子 広報委員長／東京医科歯科大学】

好天にも恵まれ、6 月の強い日差しの中、リハビリテーション医療にかかわる先生方が渋谷に集結し、熱く活発な討論が繰り上げられました。リハビリテーション治療にまつわるさまざまな器械は渋谷ヒカリエの一角に展示され、スニーカーで会場を闊歩するという、非常に斬新で印象的な学術集会でした。日々のランチョンセミナーのお弁当も会場ごとに異なるなど、新しい趣向が凝らされていた点も興味深かったです。

学術集会初日の「公益社団法人日本リハビリテーション医学会 60 周年記念講演会」は、リハビリテーション医療の現在までの流れを詳細に理解することができ、非常に意義深かったと思います。特に、日本理学療法士協会、日本作業療法士協会、日本言語聴覚士協会、日本義肢装具士協会の代表の先生方が紹介された各協会の歴史と取り組みのお話から、現在の各職種の活動を広く知ることができました。

今後も日本リハビリテーション医学会は、毎回さまざまな新しい挑戦に取り組み、発展を続ける医

学会であってほしいと願っています。

【石田由佳子 広報委員／奈良県立医科大学】

渋谷駅の西側と東側に会場が分かれており、また観光客も多く、会場間の移動に時間がかかりました。最初のうちは道がわからず、案内図を何回も確かめながら移動していました。第 6, 7, 8 会場はセルリアンタワー東急ホテルの 39 階にあり、会場前の窓からは、普段見られない都会の街並みを楽しむことができました。

教育講演 82「小児分野でリハビリテーション科医師として働くための基礎知識」が印象的でした。小児期から成人期にかけての患者・家族とのかかわり方、目標設定、教育も含めたチーム医療についてなどをご自身の経験をもとにご講演されていました。小児患者のリハビリテーション診療の際に参考にしたいと思います。

エレベーターが混んでいて待たないといけない時間があり、会場間の移動に思ったより時間がかかりま



開会式で挨拶をされる安保雅博会長



60周年記念講演会で講演される久保俊一前理事長

した。また、混み合っていて席がなく入室に躊躇する会場も多くありました。会場前のモニターなどで聴講できるような仕組みがあればと感じました。

【酒井康生 広報委員／島根大学】

約 30 年ぶりの渋谷でしたが、街全体から放出されるエネルギッシュな空気は昔のまま、フラッと立ち寄ったレコードショップで当時はまった渋谷系を懐古しながら、いつの間にか気分は高揚。渋谷のもつ独特の魅力にすっかり心を奪われた学術集会となりました。

シンポジウム「リハビリテーション治療における動物介在療法」は、可愛らしい介助犬との触れ合いも交えて、動物介在療法の可能性を感じさせる、大変興味深いものでした。聖マリアンナ医科大学病院の勤務犬紹介ビデオには、座長の佐々木信幸先生ご自身が作曲された BGM が流れ、佐々木教授のミュージシャンとしての才能も満喫することができました！

【鶴川俊洋 広報委員／鹿児島市立病院】

私の発表が初日午前、座長が最終日午前という日程でしたので、4 日間参加しました。地方在住者には不慣れた渋谷という土地で、かつ各会場が分散していたため、最初は地理的な時間配分が読めず戸惑いました。また施設内移動の時間、エレベーターの待ち時間、セッションの人気度や各部



シンポジウム「リハビリテーション治療における動物介在療法」に参加した介助犬

屋の規模などを考慮して聴講予定を一部変更せざるを得ない状況でした。オフィスカジュアル推奨であったことは大変助かりました。

今回は指導医講習会・専門医共通講習会を多めに聴講し、広範囲な領域を一括して学ぶことができました。若手医師の教育講演は大変フレッシュで参考になるとともに、先輩医師の講演が少なくなったことに時代の移り変わりを強く感じました。関連専門職のポスターは通常のサイズで発表させてほしいと思いました。

各会場が分散していたため、知人と出会いにくい・立ち話がしにくい環境だったように思います。対面開催が復活してきましたので、できるだけコンパクトな会場での開催を願います。全員懇親会は今後も開催されれば参加いたします。

【原 貴敏 広報委員／国立精神・神経医療研究センター】

会場が分散していましたが、そのエリア内での移動はスムーズで、意外にセッションとセッションの間の移動は、普段の学術集会と比較して短く感じました。会場間の移動も、最初は戸惑いましたが、一度行くと慣れることができ、時間的に余裕をもって行動できました。また、渋谷ヒカリエ会場のコーヒーが大変美味しく、暑さを忘れるくらい爽快でした。



ハンズオンセミナーの様子



事前のオンライン参加登録で取得した QR コードからネームカードを発券する様子



ポスターセッションの様子

今回の学術集会では、教育講演を中心に若手のリハビリテーション科医の発表が多く、新鮮であったという意見を多くの先生から感想としてうかがったことが印象的でした。

シンポジウム 42「失語症に対するリハビリテーション医療の最前線—現状と課題—」に参加しました。失語症は長期の言語聴覚療法により改善・維持の可能性があるにもかかわらず、介護保険制度との関係で十分に患者に行きわたっていない可能性があること、また本邦の言語評価においては、標準失語症検査が一般的であるが、世界的に標準化された評価などの使用や、コミュニケーション障害に焦点を当てて生活の質の評価も重要である点が興味深かったです。

新型コロナウイルスの蔓延の収束以後、オンデマンドでの配信が一般的になり、かつ継続されてい

る現状において、学術集会の会場へ足を運ぶことの意義を高めるようにする必要があったと感じました。

【正岡智和 広報委員／昭和大学藤が丘病院】

開催地が渋谷ということは今までになく、どのような学術集会になるのかが想像もつきませんでした。しかし実際に現場にうかがってみると、仕事や遊びなど普段の生活を営む人々を見ながらそれぞれの会場に入ると打って変わって学びの場が広がるというギャップがとても印象的でした。各会場に向かう際にも喧騒が広がるいつもの渋谷の街を歩いているのに斬新さを感じるとともに、日常に近くあるべきというリハビリテーション医療の世界観を垣間見たように思います。

今回の学術集会では教育講演においても多くの若い先生方の活躍が目立ち、興味深く拝聴いたしました。また今年1月に生じた能登半島地震に関して日本災害リハビリテーション支援協会(JRAT)の活動報告がこれだけ迅速に行われたことには驚きましたし、今後活かせる講演であったと感じました。

前例のない斬新な立地でしたが、新しい時代に向けた取り組みとしてもよい学術集会だったと考えています。準備も大変だったと思いますが、かかわってくださった先生方には感謝申し上げます。

(文責 広報委員会)